

# 中世都市の条件について

— 不 確 な 諸 例 —

松 山 宏

## はじめに

私は先に発表した『中世城下町の研究』で、中世において存在した都市を城下町を中心に門前・港津・宿駅なども合わせて示した。そのさい当然のことだが都市とする基準も述べた。この稿ではその基準に忠実であることを明らかにするために、あいまいで不確な例をあげることにする。

### 一、条件とその意味

最近の中世都市研究は文献史料を基本としながらも発掘が重要視され地理学での景観・空間・地名が注目され、都市の影、闇の部分を扱う民俗的方法、さらに絵図・絵巻物も取りあげられている。このため中世都市に対する従来の定説のイメージも変わってきている。たとえば堺（和泉）で

ある。ここはこれまで「町は甚だ堅固にして西方は海を以て又他側は深き堀に囲まれ、常に水充滿す」、あるいは「此町は甚だ堅固にして……城中に在るが如く安全なり」とされていた。しかし昭和五二年（一九七七）から一四年間四百ヶ所を発掘した報告によると次のようである。大内義弘による応永の乱のときの焼土層は少ない、環濠は東部に集中しそれも素掘りである。四百ヶ所といっても全面積から見れば一部であり、これですべてを推しえないが、それにしても従来の研究に対する基本的な再検討が要求されていることは否定できない。文献・歴史地理・考古などの専門的立場からすすめられた学際的な清須（尾張）の研究などは、今後の方向を指し示しているとみてよからう。<sup>③</sup>

ただ取りあげられる都市はほとんどが戦国期ことに織豊時代である。なぜその時代が重視されるかといえば、中世

都市がその時期に完成した形をとるとするからである。つまりこれまでの中世社会は村落ないし農民を基本として形成されており、都市ないし商工業者は付屬物にとどまっていた。しかしこの時代になると、都市の中でもっとも多くの数を占める城下町が村落と異なる生活の場をつくっていく。総構という言葉に象徴されるように、武士・寺社・商工業者らは村落から切り離された別個の空間をつくっていく。そしてこの言葉が一般的にみえるのがその時代であるから、ここに一線をおいて画期とするのである。

惣構えを強調し、画期を重視することは間違いでない。しかしこれがそれ以前に都市はなく、都市づくりへの動きをもっていないとすることになるならば問題である。いうまでもないことだが一つの画期は突如おこるのでなく、長い歴史の積みあげによるのである。その点で、たとえば初期城下町などはもっと検討されてよい。それがあつたればこそ完成したとされる城下町となるのである。後代からみればそれは未熟であろう。しかしそれが存在した時代において未熟であつたかどうか、場合によればそれは完成した都市であり、その時期においてもっともふさわしい都市であつたかも知れない。これは都市の定義とも関係するが、

いずれにせよ戦国以前にもっと注目すべきだと思う。

私がこのことを主張するもう一つの理由は古代都市との関係があるからである。古代都市を地方の各地域にみると国府があげられる。個々にみると衰え、消滅するものもある。しかし総体的には発展し、中世において新たな展開をしているとみるべきであろう。移転により場所が変つても、それらは依然権力機関の所在地である。そしてそれを基地として交通・経済・宗教などの機能が活動すれば、国府がなくなることはありえない。とすればそこから中世へ発展するものが現われるのも当然である。むろん中世都市がすべて国府から成長したというのではない。中世都市、ことにその代表である城下町は多く城館を出発点としているのである。とにかく国府の発展にせよ城館から発足しているものにせよ、初期城下町といわれるものは各地に存在している筈である。

ところでこの城下町は古代の国府のように中央権力により上から一方的に設けられたのと異なっている。それは地域の在庁あるいは在地領主によってつくられ、地域的諸条件を基礎にしているのである。またその景観は多分に村落的である。城下を構成する基本的階層の武士は通常村

落に住み、農耕から離れていない。城下に住むのは公務のためであり、本拠は村落にある。逆にいえば城下には田畠が存在し、道路もその間を通っていることにもなる。土農分離は不徹底で、総構のようなものはなかったのである。

これは国府が発展して府中になる場合にもいえる。府中は国府より地域の規模が大きいとされる。国府は方八町とか方六町、方五町などが普通である。最近の研究によると、国衙などの中央施設と他の施設は必ずしも一ヶ所に存在していないとされるが、メイン部分だけにしぼると、その範圍は右にみるような規模にとどまっている。これに対して府中は広く数軒四方にわたり、信濃・伊予国では郡規模になっている。備後国では近世史料によると「此アタリ四、五村ミナ府中ノ郭内ナリ」とある。このような広さになっているのは村落を含んでいるからである。ではかかる府中を都市とみるべきであろうか。初期城下町に相当したものとみてよいであろうか。方八町の古代都市が中世になり一挙に何倍あるいは何十倍かの境域をもつ都市になることは考えられない。むろん、これは府中だけでなく一般の城下にも適用される。

私は先にこの時代の都市とすべき条件を幾つかあげた。

以下のようなものである。一国支配の城館、一国規模の信仰を集める寺社、隔国ないし外国船の入る港津、一国の幹線にそう宿駅、市または町、それらを一要素とし、そのうち二つをもつ所また戸数は百戸前後を都市の最低条件とした。これに先では触れえなかつた境域を加えたい。その諸例は以下のようなものである。革手（美濃）は東西が不明で南北が四・五百米、福岡（備前）は五百米と三百米であり、比較的コンパクトにまとまっている。一方下津（尾張）は狭くみても三百米と二軒、花倉（駿河）は四軒と二軒、稲村御所（陸奥）と秋月（阿波）は四軒と三軒、甲山（備後）は四軒と二、五軒である。若干の差はあるが、ほぼこの程度を都市の範圍とみたい。したがってこれ以上に広い信濃・伊予また備後国などの府中を都市とみてよいとは思えない。中世都市は古代都市の延長線上に位置する。時代も違い環境も変化するから両者の形態と実態は異なっている。しかしその差異はかけ離れたものであつてはならず、右に述べた二つの要素と境域の条件はそれを考慮にいれてつくつたものである。そしてその条件を外れたものは都市でないと考える。以下都市から外したものを具体的に例示することにしたい。

## 二、具 体 例

### 古市（大和）

春日山の西麓端台地にあり、現奈良市古市町の字古城つまり東市小学校の校地が城館とみられる。鎌倉末期から筒井・越智・十市氏と並ぶ有力国人古市氏の根拠地である。

この地は上街道に沿い、初瀬詣の旅客などが多く馬借もみられる。乾元元年（二二〇）興福寺大乗院がこの地にあった福島市を大乗院郷に移して南市を開き、その後ここを古市と称したとされる。古市氏は応永二十一年（一四一四）に官符衆徒の筆頭、つまり守護代になっている。文安二年（一四四五）から文明五年（一四七三）にわたり前大乗院門跡の安位寺経覚を迎え、文芸活動が活発に展開されている。経覚を長期間滞在させ、多くの文化人を接待したことからみて、かなりの施設、設備がここにあったと思われる。ただ福島市移転後この市がどうなったのかはつきりしない。文明十七年十二月ここで火事があり、「古市之南口小屋共焼了、二十五六間焼失」とある。町屋もあつたらう、しかし右の焼失家数も一部か全部か確認できない。

### 長野（伊勢）

安濃郡長野を本拠地とする国人長野氏の城館地である。

長野氏は応永期（一三九四—一四二八）より幕府奉公衆として幕府料所を預けられている。飯田良一氏のご教示によると、鈴鹿郡安楽御厨を知行し河曲郡南職田御厨代官職を請負い、禁裏領栗真庄代官職をえている。永享五年（一四三三）十一月の延暦寺攻めには守護土岐世安から離れ、独自の軍勢を率いて西坂本に向かっている。同十二年五月には大和国への出兵中、長野氏が合力之勢と共に守護土岐世保を討った。その後国司北畠とも戦っている。これからみてかなり有力な国人であったことが分る。寛正四年（一四六三）三月、北方八郡の河籠米を徴収し、神宮の御裳濯川（五十鈴川）の堤防修理が守護一色と並び、鈴鹿郡関氏と安濃郡長野氏に命じられている。守護権力の一部が分与されているのである。

現安芸郡美里村に南北朝期の築城とみられる城跡があり、その後室町期になり伊勢・伊賀国を長野峠越で結ぶ北長野に平山城を築いた。『日本分県地名総覧』によると、前田・関屋らと並び横町・下町・上町・新町がみえる。しかし城下と関係するのかわりか不明である。

### 宮山（尾張）

南北朝期に一色氏が現常滑市の北西に位置する知多郡大野荘を支配し、観応元年（一三五〇）範光のとき宮山城を築いた。その後詮範は三河国守護としてこの分郡守護でもあった。宮山城には城山の北山麓に城下の地名があり、城の南に金蓮寺の他宝蔵坊・池之坊以下の十二坊がある。文明期（一四六九—一八七）以降に被官佐治氏が拠っている。鑄物師がおり、戦国期には廻船がみられるが、室町期の状況がもう一つははっきりしない。

#### 横地（遠江）

東海道線菊川駅の東南五軒にあり、全長二軒余に及ぶ大きな城郭が遺っている。源義家の落胤横地太郎家永が築いたとされる。鎌倉時代は鎌倉御家人としてあり、南北朝期には足利氏に任せ各地に転戦した。応仁大乱のさいには守護斯波義廉に属し、文明八年（一四七六）二月、駿河国守護今川義忠に攻められて亡んだ。

城址には斯波氏の屋敷が存在したことを伝える「武衛原」の名をもつ茶畑があり、本丸・二之丸があり、三米の土塁と木戸址を遺す中ノ城もある。「横地城図」をみると本丸の南麓を城下、西からの登り口辺りを御城下町おんしろしたまちといっている。城下の名称は後世に作られた可能性があるが、武士の

集住が推察できる。

城址の南四・五軒の所に市場の地名があり、その南東に相良さうらに通じる街道があつて、それに塩貝坂の名がついている。塩商人が往来したのだろうか。商業のことを示すのはこれだけで、城下町の名称はあるが、そこまで発展したかどうかは疑問である。

#### 小川（駿河）

小川城主法永長者は小川湊の豪商のようで、長者屋敷略図がある。<sup>(15)</sup> 文明十七年（一四八五）に「小河大船多」とあり、<sup>(16)</sup> かなりの港だったようである。明治九年（一八七六）の地籍図によると、城ノ内・竪小路・西小路などの地名があり、屋敷跡とみられる区画が幾つかある。焼津市埋文調査事務所丸山博信氏のご教示によると、城址は堀を含めて一〇〇×五〇米の規模で堀幅は二〇米ある。字城ノ内の真中を立小路が走っている、とのことである。ただし法永長者に関する文献はなく、市はみられない。

#### 石和（甲斐）

鎌倉時代以来の守護武田氏の居館地である。だが移動が多い。文化期（一八〇四—一七）の著『甲斐国志』などの地誌にみると、永享期（一四二九—四〇）の信重のときに

石和の小石和に館があり、次の信守は八代に移ったが、これをついだ信昌は文正期（一四六―一四七）に川田に移り、信繩・信虎とここに居住したようである。

信重館には南小路・前小路・宿町・的場・町屋・大門などの地名が、信昌館には公角屋敷・舞台・女中屋敷・大庭・築地・サンフ・出水・久円・御厩・的場などの地名がある。小石和と川田の間は四軒ほど離れており、地名だけでみると小石和に城下があったようである。といって川田になかったのではなからう。川田から信虎が躑躅ヶ崎つじまきに館を移したのは永正一六年（一五一九）であり、それ以前に石和では館の移転にともない城下も移ったろうと思う。ただし確実な史料がない。

#### 江戸（武蔵）

平安末期から鎌倉時代にかけて江戸氏の居館地である。江戸氏は鎌倉御家人である。その後はつきりしないが長禄元年（一四五七）四月に、太田道灌が江戸城を築き人々が集まった。道灌は扇谷上杉氏の家宰である。軍法に通じ、和歌の嗜みも深く、歌会をしばしば催している。城下平川には法恩寺・淨心寺・吉祥寺などが建ち、本郷辺には町屋が営まれたとされる。<sup>19</sup> 平川河口は房総・常陸国からの物資

を運ぶ船舶で賑わったといわれるが、具体的にその活動をつかむことができない。

#### 品川（武蔵）

神奈川（武蔵）・六浦（武蔵）と並ぶ港である。明徳三年（一三九二）一月から八月までの間に三〇艘が入港し、間も三軒みえている。また明徳三年から応永三年（一三九六）の五ヶ年で品川と神奈川から徴収した帆別銭は三三九貫余ある。これは金沢称名寺の金堂建築費の九一パーセントにあたっている。問の存在に加えて関東における隔地間取引の窓口であったことが湊の繁栄を支えていたと思われる。

宝徳二年（一四五〇）・文明八年（一四七六）には鈴木道胤らの富裕商人がみえ、寺院も多く建立されている。室町時代に建立された寺院は十一を数え、道胤は妙国寺に七堂伽藍を造った。熊野・伊勢御師の活躍もみえる。<sup>19</sup> 感覚的にみた場合都市とみてよからう。ただ市とか町がないので除くことにする。

#### 篠脇（美濃）

東胤行が承久の変の功により郡上郡山田庄を与えられた。かれは弘長三年（一二六三）に八五歳で死亡したが、晩年

に築城したらしい。皇族將軍宗尊親王の和歌の師である。その子二代行氏・三代時常はいずれも和歌に熟している。

応仁二年（一四六八）常縁のとき、美濃国守護代の斎藤妙椿に攻められ落城した。しかし常縁は十道の歌を献じてとり戻したとされる。かれは和歌の達人で、文明十三年（一四八〇）に後土御門天皇の勅命で上洛し、近衛政家らに古今伝授し、連歌師宗祇と交流を深めた。

昭和五五年（一九八〇）から五八年にかけて館跡が発掘され、六〇×八〇米の館、石組の池と庭園、多くの出土品が確認された。町史編纂所では、城下に二・三百戸位があり、明応九年（一五〇〇）に山田庄栗栖郷八日市がみえ、これが現在の八町であると述べている。だがこれだけでは史料不足である。

#### 神岡（飛驒）

南北朝期に、江馬氏が越中国砺波郡から飛驒国北部の高原郷に入部した。中期に山科家被官となり、北野天満宮・烏丸家雑掌ともなっている。文明期（一四六九―一八七）には中央部へ進出し、国司家姉小路と並ぶ勢力をもった。明応期（一四九二―一五〇二）に鉢山を開発し、これが江馬氏発展の財源となっている。大守殿に高原諏訪城跡・下館

跡・御館跡がある。延享期（一七四四―四八）の著『飛州志』には江馬之下館は根小屋跡と記されている。

昭和五一年（一九七六）から発掘がされ、出土物が多い中で、ことに曲水宴を催した玉石が並ぶ見事な庭園遺構が確認された。南北朝期から室町初期頃までの館などの建物発掘立だが、まだ多くは埋没状態にある。「元禄検地水帳」には土井・土井の内・土井の上・ばば西・堀・堀はた・山越・やましたなどの字名がある。現在城下町の町名がある。ただ中世城下を確かに示す史料がない。

#### 志久見（信濃）

現下水内郡にある志久見郷は弘長期（一二六一―一六四）ないし弘安期（一二七八―一八八）に、市河氏が中野氏から地頭を譲られて支配を始めた。南北朝時代には越後国の新田一族の攻撃にさらされながらも国人領主として成長した。その後大塔合戦など幾多の戦いに、市河氏は常に守護方として行動している。

箕作に館をもち、その対岸に渡船場があり、小穴川関も支配している。おそらく詰の城であろう牛窪城の麓に城下の地名があり、また志久見集落にたて・殿やしき・反町・元かじやなどの地名が残っている。ただし市はない。ある

程度の武士の集住が考えられるが、時代がはっきりしない。

#### 平井（上野）

永享一〇年（一四三八）に惣社長尾の祖忠房が金山城を築き、その北続きに平城の平井城をつくった。そして山内上杉の顯定（一四五四—一五一〇）から憲政（一五二三—七九）まで在城し、管領府をおいたとされる。この地が重視されたのは、上杉被官が白井（上野国）の長尾氏と滝山（武蔵）の大石氏であり、その中間の平井が政治的に都合のよかつたこと、また鎌倉から信濃国を通り領治する越後国に通じる主要路に当り、さらに近くの日野から鉄が産出していたことがあげられる。

他に例のない城下を包む外濠がある。現在「関東管領平井城址保存会」の手により「平井城金山城鳥瞰図」が描かれ、その解説に顯定のとき城下には町家が並び市が立ち、諸国より人の往来もはげしく、人口は五万とも八万ともいわれた、と述べている。これは外濠の存在とかまた三之丸の所を今浦宿・殿小路とよんでいるのと関係するのかも知れない。ただしそれを裏すける史料がない。

#### 茂木（下野）

常陸国守護八田（小田）知家の三男知基が芳賀郡茂木保

五ヶ郷を譲与され、保名を苗字として支配を始めた。南北朝時代には領域が倍加し、上杉禪秀の乱、永享の乱、結城合戦を乗りこえ国人領主として成長している。文明一四年（一四八二）には統一的な貫高基準をとり、非血縁の地侍五六名を家臣化した。

現在茂木には、城山・館・上郭内・下郭内の他に横町・縦町通、さらに大町・仲町・上町・拮梗町などの地名がみられる。茂木氏は戦国時代には佐竹氏に服し、文禄四年（一五九五）に常陸國小川城に移った。したがって右の諸町は戦国時代のものかと思うが、地侍の家臣化をみると、これらの城地への集住と城下町化が考えられないでもない。ただしこれ以上は分らない。

#### 田島（陸奥）

藤原秀郷の子孫で小山一族の長沼氏が鎌倉期ないし南北朝期に入部した。現在の福島県会津郡田島町の東方にある北下原がその地で、ここに応永期（一三九四—一四二八）に築城した。その後長禄二・三年（一四五八・五九）頃に鳴山城に移り、ここが寛永四年（一六二七）まで城地となる。北下原は現在伊南町古町といひ、また詰の城として駒寄城があり、西館が三〇間四方、東館が三六間四方の規模



があり、土塁と堀が遺っている。さらに横町・北小路町・殿町などの地名もある。<sup>(86)</sup>

とすればここから移った鴨山城下では一層充実していたと推測されるが、文書・記録・図面などはほとんどない。昭和五年（一九七六）から実測と発掘をし、おそらく戦国期以降の改修になる土塁・本丸・二之丸の礎石、石積調査を行なった。<sup>(87)</sup>しかしこの時期の城下についても分らない。

#### 酒田（出羽）

『義経記』七に坂田の渡とあり、鎌倉初期には海上交通の機能をもっていたことがうかがえる。「酒田市史年表」によると、文治五年（一一八九）奥州藤原氏の遺臣三六騎が秀衡の妹徳の前に従い、来往したとみえる。ついで延元元年（一一三六）に最上川の交通運輸が開かれている。文明期（一四六九―一八七）に武藤氏が最上川南に東禅寺城を築き、川上の庶族砂越氏と対立している。明応元年（一四九二）七月に向酒田千余軒、当酒田百五十軒とあり、大永元年（一五二一）八月に三六人衆が向酒田から移転して本町に町づくりを始め、浄土宗関係の寺院も多く建立された。室町後期には都にも聞えた港となっており、これからみて室町中期の都市化も予想できるが確実な史料がない。

#### 宮腰（加賀）

北加賀の代表的な港である。守護所野市また白山宮との重要な流通路にあたる要衝である。十四世紀には大野荘の年貢・公事物の保管・積出しが主であったが、その後商船往来がみえる。犀川河口左岸で発見された普正寺遺跡の発掘により、加賀国に類例の少い大規模な五輪塔や板碑などが出土し、日本海沿岸と畿内を結ぶ隔地間取引の仲継港であることが認められた。三国湊（越前）・放生津（越中）と並ぶ港で、十五世紀には紺掻の他に酒・檜物・鍛冶の生産も予想され、明応四年（四五九）には塩町が形成されている。商人・高利貸の活動も考えられ、一向宗寺院も進出する。<sup>(88)</sup>決め手の文献がないので断定できないが、都市の可能性はあったろう。

#### 志雄（能登）

羽咋郡志雄保には弘安期（一一七八―一八八）に地頭得江がいた。この地は、志雄を含む邑知平野と日本海岸の水見浦とを結ぶ流通路にあたる水見へ向う路の志雄越を塩坂ともいっていたので、塩商人が往来したのであろう。平野の中心にある子浦<sup>しほ</sup>と隣りあう萩市には市があった。正長元年（一四二八）には得江氏に代って飯尾氏が地頭として見え、

その在所は志雄町にあるとされている。大永六年（一五二六）の年貢米銭納帳には志雄西町代官取沙汰、同東町代官沙汰とあり、ここは東町と西町で構成され、番匠・鍛冶・紺屋などがみえている。ただ時代は十六世紀である。

#### 中条（越後）

現在の北蒲原郡にある。鎌倉中期の景観を示すとみられる有名な奥山庄絵図に七日市がみえる。市場は地頭三浦和田の惣領茂連の屋敷に近接している。茂連讓状案によると、永仁二年（一二九四）六月に「七日市之南町屋」とみえる。絵図では七戸が数えられるが、これに相当するのだろうか。市の町屋というのは市場が次第に恒常的な町場化しつつあることを示している。また南町屋とあるから北町屋も考えられ、そうなると二つの町となる。ただ市の規模にもよるが、他地域の例から推してこの市はさほど大きくとも思われない。そしてその中の町屋であるから数はさらに少ない筈である。なおこの近くに駒籠之酒町もあるが、この町はどのようなものかよく分らない。市と町がある以上都市とみるべきだろうが、規模からみてそうともいえない。

#### 府中（因幡）

昭和四七年（一九七二）から五年間にわたり現岩見郡国

府の町屋・中郷・庁・法花寺・安田の部分発掘が行われた。その結果以下のようなことが明らかになった。中郷の大権寺では下級役人の住宅とみられるもの、国司クラスの邸宅があり、いずれも鎌倉時代に建設されている。掘立柱跡十一を含む櫓・井戸・溝・暗渠・柱穴などが検出される。その他奈良末ないし平安初期から室町時代にかかる建物遺構はじめ暗渠・石敷道路があり、白磁・青磁・陶器・木簡・漆器の他に鉢・羽釜・金具などが出土した。法華経と経筒も出土し、刀鍛冶・土器作りなども考えられ、またかつての国府城を囲んでいた城砦も存在している。その一つで町屋にある飯山城が鎌倉時代の守護所ではないかとされる。

この地域には鎌倉時代に正殿を含んだ国庁が所在しており、南北朝時代には伊田氏が守護的地位にあった。そして守護所・官衙・居館を中心に、大道により町・津・寺社・城塞が結ばれ、八町四方をこえた地域に都市的景観が展開していたと考えられる。ただ文献史料がなく、それらを裏付けることができない。守護所は暦応三年（一三四〇）ないし文和期（一三五二―一三五五）に二上山に移った。その後ここがどうなったのか不明である。

#### 東郷（伯耆）

貞治五年（一一三六）に南条貞宗が現在の東郷町羽衣石に築城した。城の屋根は板か草葺で瓦は出土していない。居館はその北麓松ヶ崎におかれたが時代と共に移転した。

羽衣石城の東西北二百米ないし一、五軒の範囲内に番城・屋敷・市・鍛冶屋・鋳物師・紅・木挽・金屎の地名がみられる。その他鳥羽屋敷・豊嶋屋敷・景宗寺・観音前さらに新市・西市も遺っている。寛延期（一七四八―五一）頃の著『伯耆民談記』には、侍小路・社寺・町屋が記されている。ただ城麓を北に流れる羽衣石川に沿った両側には広い平地がみられず、城下が存在したとしても川に平行する道路に面してつくられるに止まったのではなからうか。いずれにしても右の地名の時代を特定できない。南条氏は関ヶ原戦に敗れて亡ぶまで二五〇年間存在しており、現在模造城が築かれている。

#### 益田（石見）

源平戦で源氏を支持し、押領使に任命されたる御神本國兼は、建久三年（一一九二）益田に移り、益田姓を名のり上々々茂に土居をつくった。ついで大谷に移ったが、応安元年（一一三八）の焼亡により三宅御土居を館地とした。そして鎌倉時代に築城されたりしい詰城の七尾城と結ぶ道

路を開き、これと直角に交差する妙義寺への参詣路とを軸に城下プランの基礎をつくった。

益田氏は十三世紀に石見国惣田数の三分之一をもち、南北朝期には実質的に守護であった。室町時代は大内氏に属したが、石州の有力国人として権勢を振った。出雲国美保関、石見国江津・浜田・長浜と並び朝鮮との貿易は活発であった。御土居の西に位置する今市港は山陰屈指の港津とされる。寺社数も多く、文人僧侶の来訪があり、万福寺本堂とか医光寺東門は有形文化財で、夫々に雪舟作の庭園がある。益田は単に辺境の城下町でなかつたのである。城下形成は南北朝初期から序々に行われていたと考えられるが、ただその経緯を具体的にいうことができない。

#### 室津（播磨）

奈良・平安時代に五泊の随一とされ、鎌倉初期に賀茂別雷社が御厨を設けている。法然がこの地の遊女に説法し、文治期（一一八五―九〇）には室長者もみえる。正応二年（一二八九）九月、西大寺叡尊の弟子性海が魚住泊修築のために室泊以下三ヶ所のうち一所で十年を限り入港船から積荷一石別に一升の津料を徴収している。往来する船が多かつたのである。『庭訓往来』には室兵庫船頭とあり、兵

庫と並ぶ港津であったことが分かる。

応永十一年（一四〇四）に「をきなう船」が入港している。これは沖繩の船かとされる。文安二年（一四四五）一月八日から翌年一月七日に至る間、この船八二艘が兵庫北関に入港している。重要な港の所在のために室山城が築かれ、源平戦また南北朝期にも戦斗が交わされ、応仁大乱のさいには大内政弘が五百艘をひきい入港した。<sup>(註)</sup>戦国期以降になると石山戦に馳せ参ずる讃岐門徒の上陸地となり、豊臣秀吉の時には政庁に往来する人々が頻繁に往来している。かかる盛況は中世においても同じで繁栄した港であったとみてよい。ただ都市とすべき市あるいは町がない。

#### 院庄（美作）

山陽と山陰を結ぶ分岐点に位置し、南方には物資輸送に便のある吉井川が流れている。国衙に近いこともあり、鎌倉時代の守護所々在地と考えられ、東西二五〇南北三〇〇米以上の館が確認されている。発掘調査により井戸・柱穴群、土塁遺構も明らかになり、須惠器、墨書を含む陶磁器・土鍋・鉄鎌・木器など平安末期から室町期にわたる出土遺物が認められている。全域にみられる黒色土層は、鎌倉時代かそれを大きく下らない時代の生活面をみせている。<sup>(註)</sup>

の西方隣接地には安国寺が建立された。御館・堀・御館堀・大門などの字名を遺している。<sup>(註)</sup>

ただ一九七四年に報告書が出されてから、一九八九年三月に至る間の研究・調査はない。南北朝期の守護所の場所是不確で、市とか町とみられる所はない。

#### 金川（備前）

承久の変後に地頭松田が武蔵国神奈川から御津郡のこの地に入り、同じ名をつけたのに始まるとされる。文明十二年（一四八〇）に備前国西方の四郡を支配する守護代松田元成が入部して金川城を築いた。また備前国四大寺の一つである日蓮宗妙国寺を造営して備前日蓮宗の拠点とした。

ただ同寺は城内に建立され、閉鎖的だったようである。この地で字<sup>う</sup>廿<sup>ち</sup>刀<sup>ち</sup>が作られている。文化財保護委員長の内田誠也氏は、武士の集住を示す根古屋があり、二百ほどの戸数があったのでないかとされる。一説で元成は城下居住者に永代地子免として<sup>(註)</sup>商工業者を集めたともする。妙国寺の閉鎖性、また永代地子免が一説であることから都市と断定することができない。

#### 神辺（備後）

文化六年（一八〇九）刊の『福山志料』などの記録によ

ると、建武二年（一一三五）に守護浅山条就が深安郡紅葉山に城を築城したとされる。この山麓を山陽道が通っている。その後守護は多く交代し、城地も移ったと思われるが、応永八年（一四〇一）に山名時熙が守護となつてから山名氏に固定し、嘉吉三年（一四四三）に守護代犬橋満泰が再築し神辺城とした。その後ここは備後国支配の城地として近世初期に至るのである。城麓には古屋はじめ土居・堀・垣内・家後（警固）屋の地名伝承があり、東から西へ七日市・三日市、南へ折れて十日市また古市の地名が遺っている。

城周辺に二四ヶ所の山城の伝承があり、いずれも山名被官の居城地だったようである。このことは神辺城下への武士の集住が充分でなかったように思われる。市名は城下を予想させるが、いつの時代のものか明らかでない。最近二〇年間余りは中世に関する調査研究はされていない。

### 三入（安芸）

安佐郡熊野社領三入荘には承久の変後に熊谷直時が地頭として入部した。大林の伊勢ヶ坪に築城したが、そこには友近屋敷・岸添屋敷・水落屋敷・山田屋敷などの伝承がある。文永元年（一二六四）の舎弟祐直の相論に関する関東

下知状の中に「山口原町屋在家参宇事」がある。ここには都市の可能性があるが、この町屋がどこかである。第一に考えられるのは伊勢ヶ坪城に近い町場である。しかしその場所は分らない。第二に三入荘の倉敷が佐東川口に設けられている筈だから、その辺りである。第三に伊勢ヶ坪城の西南二ないし三軒に上町屋・下町屋の地名があり、この可能性もある。夫々の小字名を調べると、前者には大地・河原・町屋・胡子・落迫・新迫・五郎丸・土生田・又河内・寺原・森下・突田・甲屋・下小野・上小野・定信・樫原があり、後者には岡田・生田・難波・山根田・遠道・馬場・紙屋・下久保・峠河内・清泉・土居・才本・横川がある。下町屋から二軒南に高松山があり、ここは熊谷氏が戦国初期に移った城地とされる。すると上町屋・下町屋はその城下になるのだろうか。

以上三つの可能性をあげたが、これ以上を明らかにする史料がない。

### 小倉山城（安芸）

南北朝中末期、吉川経見は山県郡大朝間所の駿河丸から新庄の小倉山に本拠を移した。ここは標高四六〇米、比高八〇米の小丘である。本丸は三角形であり、少い兵力で防

禦を効果的にする造作といわれる。南方に新庄盆地を東西に流れる可愛川があり、北方には山麓を迂回して松花院川が流れる要害地である。寺院址が多く、地名としては上松花院・下松花院・天徳院・浄喜庵・松花院・他宗寺があり、寺址として西禅寺・正観院・実相寺・極楽寺・浄慶庵・頓教寺・吉城寺・明泉坊がある。氏神の龍山八幡神社は小倉山の西麓に現存している。これは正和二年（一一三三）經高が駿河国から勧請したもので、本殿は室町末期に創建され重文指定をうけている。

土地の史家久枝秀夫氏は西禅寺について次のようにいわれる。門前の直線道からその南方六〇米で小倉山登山道が東進し、さらにその南方四〇米で西に向って横道が分岐する。このような東西・南北の主要幹線は、小倉山城とともに西禅寺の建立にあわせた計画的町割の中で設定されたのではなく、なおこの地に所在する新庄市の初見は永祿五年（一一五六）三月の熊谷信直書状にみえる。

吉川氏は天文十九年（一一五〇）に火ノ山城に移るまでやく一七〇年間居住していた。都市化の動きは分るが、時代がはっきりしない。

## 廿日市（安芸）

承久の変後周防前司の藤原親実が厳島神主職をえ、厳島の北方対岸のこの地に桜尾城を築き、天文期（一一三二—一五五）まで子孫が居した。ここに社領の年貢物が集積され、問丸の存在も考えられる。応安四年（一一七一）今川了俊の「道ゆきぶり」に記される佐西の浦はこの地とされる。市は享徳三年（一一三四）にみえ、鋳物師も活動している。廿日市山田氏は承久年中（一一一九—一二二）鎌倉から来て厳島神社修營の鉄具を作り、鋳工も存在した。文明六年（一一七四）頃には酒屋も認められる。それ以後戦国期にかけ塩之座町・東町・後少路・洲賀町などもある。

以上の事実からみて都市を形成していたとみられるが、時代を限定できない。また桜尾城址は現在桂公園内に保存されているが、周辺は宅地化されて往時の姿をうかがわせるものではなく、十分な調査もされていない。

## 松葉（伊予）

鎌倉中期に西園寺氏は宇和郡宇和荘を家領とした中先代の乱で公宗が処刑され、同荘は没収されたが後に返還された。末期において宇和荘は三〇一町余あり、伊予国諸荘園の中で最大規模を持っている。南北朝期に公良が荘内松葉村へ入部した。室町期には現在の東宇和島郡宇和島市、北

宇和郡域にわたる広大な荘園になったと推察される。

松葉村に定住した西園寺氏は岩瀬城を築いて本城とし、後に松葉城と改名している。城下にはオドイ・馬場・ナカイチ（七日市）の地名があり、後世に山下町とされた。ただ旗下十五将は連合軍で西園寺氏は従属させることができず、おそらく山下にもかれらの集住はなかつたろう。しかし瀬戸内海を囲む讃岐・豊後国などの海辺部に家領をもち、仁治三年（一二四二）には公経が沙汰した唐船が帰朝して銀貨十萬貫と珍宝をもたらしている。

天文年間（一五三二―一五五）にそこから五百米離れている黒瀬城に移ったが、そこへは城下もともに移り、松葉町といわれた。かつての城下の住民たちの集住した所が松葉町といわれたことは、言いかえれば以前の松葉城時代に少なくとも一つの町をつくる商工人が居住していたことになるのではなからうか。

#### 坊津（薩摩）

薩摩国の西南端に位置する港である。五八三年に百済の日羅が坊に龍殿寺を建立し、上の坊・中の坊・下の坊が成った。そこは長承二年（一一三三）根来寺別院となり、一乗院の勅号を給わっている。

鎌倉時代からは島津氏の権力を背景に貿易の根拠地として発展した。ことに文明期（一四六九―一八七）以後は遣明船がこの地を経たので一層繁栄した。寺社が多く、一乗院末寺は薩摩・大隅国で四七あり、その中坊津に十八が数えられる。道元・雪舟・玄樹らの来訪も語られている。明代の『武備志』に「国有三津皆商舶所聚通海之江也、西海道有坊津・花旭塔津・洞津三津、惟坊津為総路客船往返必由」とあり、博多（筑前）・安濃津（伊勢）と並び日本三津の一と認められている。琉球への渡航も始まった。

坊津町歴史館には遣唐船の模型と復元船の寸法が述べられ、全長二〇米、最大幅七・八米、地上からの帆高三十三米、全木造とある。ただ坊津は寄港地にとどまったので大港でなかつたとされる。水中考古学発掘の先例として賑わしたこともあったが成果はなかつたらしい。文献史料がほとんどない。なや中世という坊は固有地名というよりは、そこを含み泊・久志・秋目の諸浦を包含する南北十軒に及ぶ地域名とみた方が妥当らしい。鑑真は秋目に上陸したといわれる。

## おわりに

以上、都市として不確な事例三〇をあげた。不確な理由は土農・商農未分離によるあいまいな場合もあるが、史料不足によるものが少なからず存在する。中には都市化への動きを推測できる所もあった。しかしあえて外した。感覚的判断を避けようとしたためである。それにしても、中世において不確であっても都市になる動きをすすめている所が少なからず存在したことを否定できないと思う。

### 〔注〕

- (1) 水藤真「村や町を囲うこと」『国立歴史民俗博物館研究報告』第十九集
- (2) 統伸一郎「中世都市堺」の成立と展開、一九六二・六・六 鎌倉市中央公民館分館「中世都市の成立と展開」シンポでの報告
- (3) 仁木宏「清須―織豊期の城と都市」『ヒストリア』128
- (4) この呼称が妥当かどうかは検討の余地がある。たとえば初期とすると未熟・未完成となる。しかしその時代においては完成したものであったといえないことはない。だがここでは一応これを用いることにする。
- (5) 私は『日本中世都市の研究』七五頁において、府中は国府より小規模としたが、最近は逆であると考えられている。

- (6) 谷重豊季「備後国府跡について」『島根大学法文学部地域社会教室論集』5

### (7) 同論文

- (8) 拙著『中世城下町の研究』二一六頁
- (9) 『経覚私要鈔』享徳二年一月二三日、寛正二年三月十三日
- (10) 『大乘院寺社雜事記』文明十七年十二月十日
- (11) 『節郷記』永享五年十一月二七日
- (12) 同 永享十二年五月十二日
- (13) 『氏経郷引付』寛正四年三月
- (14) 『常滑市誌文化財編』六八七頁
- (15) 『焼津市誌』一三七頁
- (16) 『梅花無尽蔵』第二
- (17) なかざわしんきち「石禾御厨と武田信光館」『武田氏研究』3、磯貝正義「武田氏と甲府」『甲府市誌研究』5、『石和町誌』第一卷五三四頁
- (18) 『東京市史稿市街編』第二、『同皇城編』第一、杉山博「後北条時代の江戸」『歴史評論』100
- (19) 『品川区史通史編』上巻三三五頁、綿貫友子「武蔵国品川湊船帳をめぐる」『史艸』30、江上文恵「神奈川湊と品川湊」『江戸湾の歴史』
- (20) 『大和村史』上巻一〇三頁
- (21) 都竹清隆「中世江馬氏の下館跡について」『飛騨史学』3
- (22) 湯本軍一「辺境地領主制の一特質」『信濃』26—9、赤沢計真「北信濃における国人領主の形成」『月刊歴史』26
- (23) 山崎「群馬県古城壘址の研究」下巻八六頁



- (24) 永原慶二「東国における国人領主の存在形態」『日本中世社会構造の研究』、新川武紀「下野国茂木庄と茂木氏の領主制について」、広島史学研究会編『記念論叢日本編』、松本一夫「南北朝、室町前期における茂木氏の動向」『日本歴史』五二二
- (25) 『田島町史』第一卷二二三頁
- (26) 『鴨山城跡発掘調査概報』
- (27) 浅香年木「十四世紀の加賀国大野荘とその周辺」『普正寺』
- (28) 「気多神社文書」正長元年六月『増加能古文書』
- (29) 『石川県志雄町史』一〇二頁
- (30) 『中条町史』資料編第一卷
- (31) 『因幡国府遺跡発掘調査報告書』Ⅷ
- (32) 『国府町誌』二六一頁
- (33) 『東郷町誌』一九八頁
- (34) 井上寛司「現在に生きる戦国城下町」『山陰中央新報』一九九一・十一月・二〇
- (35) 広田八穂『中世益田氏の遺跡』二〇二頁
- (36) 内藤高輔「中世外国史料に見える出雲と石見」『郷土石見』  
1、坂根兵部之輔「中世周布氏の長刀工」同10
- (37) 市村高男「中世領主・益田氏のまちづくり」『月刊文化財』

105

- (38) 戸田芳美「播磨国福泊と安東蓮聖」『兵庫県の歴史』13
- (39) 『相生市史』第二卷二六七頁
- (40) 『史跡院庄館跡発掘調査報告』一九七四年三月
- (41) 『津山市史』第二卷十八頁

- (42) 『角川日本地名大辞典岡山県』一五七六頁
- (43) 猪原薫「神辺城とその城主」『備後史談』二一七・九・10・12、三一・二・三
- (44) 『神辺の歴史と文化』6、立石定夫『神辺城と藤井皓玄』
- (45) 『熊谷家文書』文永元年五月二七日
- (46) 『可部町史』一四一頁
- (47) 松岡久人「嚴島門前町の形成」魚澄惣五郎編『瀬戸内海地域の社会史的研究』、『廿日市通史』通史編上四二一頁
- (48) 石野弥栄「西園寺氏の伊予下向土着の前提について」『伊予史談』267、須田武男『中世における伊予の領主』十四頁
- (49) 『宇和町誌』八八頁
- (50) 石野前掲論文
- (51) 『愛媛県史』古代II・中世六二三頁
- (52) 近藤孝純「中世における松葉町について」『伊予史談』218・219合併号
- (53) 『坊津町郷土誌』上巻五〇一頁